



#MeToo キャンペーン後の展開は？

スウェーデン

ビヤネール 多美子(スウェーデン在住)



▲映画関係者の集会

昨年10月、アメリカの女優リッサ・ミラノがソーシャルメディアで「性暴力被害者よ、いっしょにたたかおう」と呼びかけた「MeToo(私も)」運動は世界を駆けめぐった。スウェーデンではこの3カ月間「MeToo」という言葉をマスコミが報道しない日はなかった。今一度わたしは新聞を見直し、ここにまとめてみた。

始まりは2007年

この「MeToo」運動は、恵まれない性暴力被害者をつなぐ運動として、米国の黒人女性活動家タラナ・パークさん(44歳)が2007年に始めたものだ。自身も6歳の時に強姦され、過去に受けた性暴力、その問題の深さを考え、性暴力被害者のための草の根運動をずっと続けてきた。

「MeToo」はスウェーデンに革命を起こしたといわれるほど強い衝撃を社会に与えた。

これほど解放された国でなぜ？ 平等政策は失敗したのか？ それも全女性の約3分の2が何らかの性的被害にあっている、考えられないと多くの人が思ったに違いない。平等社会といえどスウェーデン、その自負がどこでいっぺんに吹き飛んでしまったようだ。

あらゆる分野に性的被害者がいる。政治家の同僚にセクハラを受けたと声をあげた男女平等大臣、ジャーナリスト、医者、コック、軍人、教師、学生…実に7万3000人の女性たちが、「MeToo」と次々に署名をし告発した。これまでひとり苦しみ、秘めていた事実を仲間たちとオープンに話し合い、運動を広げていく輪が多くの職場で、学校で

広がっている。

ダーゲンス・ニューヘテル紙の世論調査によれば、国民10人のうち7人がこの動きに影響され、家族や仲間と話した。今や「MeToo」は社会を根底から問い直す運動にまで広がっている。

労組、男性たちが動いた

労働組合は何をしたか。ほとんどの組合は職場でのセクハラ対策をそなえていた。しかし利用者が少なかったし、どれほどセクハラ問題があるのかもつかめないでいた。そこに「MeToo」が入り、組合は「話し合う勇気をもとう」というキャンペーンを始めた。男性からのイニシアティブで、北欧の男性大集会を開いたり、「男の夕食会」と称し、少人数で関心のある男性が集まって、食事をいっしょに作り、食べ、話し合う。話し合いたいという人が集まるので、なかなか楽しい会だと参加者は言っていた。このような会が広がるように組合は後押ししている。

組合の女性幹部はこういった。何年か前までは、フェミニストとこのことは何を指すかわかる組合員は少なかった。話し合い、知識を得ることで、どんどん変わってきている。「MeToo」のおかげでセクハラへの届け出が増えたとはまだいえないものの、職場でオープンに話し合える雰囲気をもてることは、健康的で大きな進歩だ。

政府、行政も動く

政府としては性犯罪の届け出が増えた理由を調査する任務を犯罪予防評議会に命じる。性犯罪につ

いての法律の見直しもする。加害者の刑が軽すぎるといふことは以前から指摘されていたことだ。

また性暴力についてより厳しくする法律の改正と、セックス同意法案を提出した。差別オンブズマンは「MeToo」の続きとして文化、メディア、法律関係の会社と組織、40機関を監督していく。市も県もセクハラ予防の仕事を継続して行く。

冒頭の女優にセクハラをしたハリウッドのプロデューサー、ハーベイ・ワインスタインのようなことをした男性が、スウェーデンでも40人ほど辞職あるいは退職を余儀なくされた。

有名なテレビの司会者を始め、国会議長、彼は「俺はやっていない」と言い続けてきたが、被害者は多数、その1人は「彼はわたしにセックスの話ばかりをしていた。出張中には部屋にまで入ってこようともした」と証言をした。

国会議長のセクハラ容疑の調査には部外の調査機関があたる。

ノーベル文学賞アカデミー委員の夫は、他の委員の妻や娘、職員多数に長年セクハラを続けていた。アカデミーは気づいていたにもかかわらず、黙認していた。

実名報道への批判も

一方、批判されたのは容疑者の名前の公表だ。普通は刑が定まるまで公表しない。しかし今回は一部を除き、マスコミは名前と写真の掲載をはばからなかった。プレスオンブズマンは、今回の名前の公表は非常に問題だと指摘した。

また男性側の「MeToo」に関する被害として、ある著名な映画監督は女性からの告発で、自



▲性教育協会の若者向け MeToo 集会で男性たちの意見を聞いている。前段に食事を出すなど、人を集める工夫も

分は無実なのに匿名女性の告発にどのように抗議したらよいのかと怒った。

人気コラムニストの1人は、自分の意見として、「MeToo」運動をスターリンの粛清や魔女狩りと比較した。それがもとで長年書き続けていたコラムの仕事が失った。

ダーゲンス・ニューヘテル紙は「たったひとりで闘う女性」として、日本の伊藤詩織さんを大きく報道。さらに「これはひとりの女性の問題ではない。世界の女性と男性が一緒に解決する問題だ」と書いた。

「あなたはひとりではない。傷がいやされる日は必ずやってくる。自分の経験を語る女性に敬意を表します」という「MeToo」の創立者タラナさんの言葉は、まさに詩織さんにも向けられたことばではなからうか。

海外旅行から1月末に戻り、終わったかと思っていた「MeToo」報道、静かに続いていて感激した。マスコミ報道の大きな力があったからこそこれだけの運動になったのだから。